

南のひと 51

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



石垣島宮良出身の前花晋作さんは、2019年に先代で叔父の仲間義人さんから「仲間酒造」を受け継ぎ、泡盛「宮之鶴」を製造している。

宮良集落内にひっそりと佇む小さな酒造所「仲間酒造」は、1948年に晋作さんの祖父、仲間義一さんにより創業され、地域に根ざした酒造所として大切に受け継がれてきた。

銘柄、「宮之鶴」の宮の字は、字名の「宮良」から、鶴の字はその縁起の良さから取り、宮良で造るお酒として鶴のように永年成長発展していきたいという願いが込められている。

「ここは、僕が小さい頃の遊び場でした。叔父が製造を続けて行くのが限界だと聞いた時に、お爺ちゃんが作ったこの場所をなくしたくなかったんです」

晋作さんは、製造から販売までほぼ全ての作業を1人で行っている。

「大学では機械工学を勉強し、卒業後就職した先も食品関係の仕事とは違ったけれど、僕ならできると思ったんです」と話す晋作さんの口調には、驕りがなく聡明で、誠実な印象を受ける。

晋作さんに大切にしていることはありますか？と聞いてみた。

「『今日を充実した1日にするために、今できることを真剣に取り組む』です。これは社会人になってから常に意識していたことで、現在も変わらず私の行動の根底にある考え方だと思います」

晋作さんの撮影が終わり、車に乗り込み酒造所を後にした。バックミラーを見ると、酒造所の前にスッと真つすぐに立ち、こちらに一礼する晋作さんが見えた。車を左折するまで、小さくなって行く晋作さんの佇む姿がバックミラーに映り続けた。

たったひとりで泡盛造りに向き合う晋作さんからは、静かで熱い気を感じた。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

南のひと 52

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



西表島、白浜在住の江袋由賀^{えたい ゆか}さんは、約20年前に北海道から西表島に移り住み、パイナップルやマンゴーを作る農園さんと出会い結婚。現在は、2人の息子たちを育てながら、小さなカフェを白浜で営んでいる。

「もともと、子どもを出産するまでは、ずっと飲食店で働いていたし、パイナップルとマンゴーは手に入るし、何かやるとしたらカフェのようなことをやりたいと漠然と思っていました」

西表島の西部に位置する白浜は、東部地区からのびる道路がたどりつく最終地点にあり、この先に道路はない。ここまで来ると、遠くまで来てしまった感覚になる。

由賀さんが営むナナシカフェは、アジア料理をいただける秘密基地のような、隠れ家のような小さなカフェだ。「ナナシ」とは、スワヒリ語でパイナップルという意味で、由賀さんはその語感が好きなのだそう。

「西表島とは、相性がよかったのか居心地がよくて、島に住む人にも惹かれました。白浜は、車でちょっと出掛けて戻ってくる時、トンネルを抜けるたびにああ帰って来たな〜、と毎回思えるところが好きです」

ナナシカフェへの階段を上った踊り場からは、白浜の入り江が望める。ぽつんぽつんと船が浮かび、その向こうには山々が連なり、美しい景色が広がっている。

「西表島にあるレストランで働くことが決まったのも、この場所と巡り合ったのも、すべてが偶然です。偶然の重なりで今に至ります」

目に見えない何かに導かれ辿り着いた場所、白浜。

トンネルを抜けた先で、由賀さんが「いらっしゃい」と迎えてくれる。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』発注は、ホームページのContactから。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

南のひと 53

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



さきはらこうめ
崎原小梅さんは、石垣島出身の中学3年生だ。小梅さんの存在を初めて知ったのは、全国中学生人権作文コンテストの授賞式に参加した時だった。中学生の娘から、「FC 琉球賞を受賞した人の作文が気になる」と聞いていたので、どんな内容なのかなと楽しみにしていたが、壇上では作文の発表はなかった。式が終わり会場から人が退場し始めたころ、どうしても気になった私は、小梅さんに声をかけ作文のコピーを譲ってもらった。

小梅さんは、「私がズボンをはく理由」というタイトルで作文を書いていた。中学2年生の冬に生徒会に立候補し当選した小梅さんは、生徒会副会長になった。「一人一人の個性を大切にする学校づくり」を目標に挙げていた小梅さんは、校則という型がある中で個性を主張することは難しいが、ズボンとスカートをどちらも着るといった選択をし、個人としての主張をしている。

昨今「LGBTQ」という言葉で性的マイノリティーの人権について取り上げられることが多くなっている。小梅さんは、「LGBTQ」という言葉を超えて全ての人が自由に「自分」でいられる世の中になって欲しいと話す。

小梅さんが、自分の性や性別について意識せざるを得なくなったのは、学校の野球部に所属していたときだった。自分以外のメンバーが全員男性であることから、自分が女性であること、部員の中でマイノリティーであることを強く意識したそうだ。

「大切なことは皆それぞれが自分はこの世界でオンリーワンだということを理解し、それを主張していけるようにすることです」

小梅さんの華奢で細い肩とは裏腹に、彼女が発する言葉には強い意志が感じられた。

水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右QRコードホームページのContactから。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

南のひと 54

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。

石垣島出身の萬木美枝さんは、結婚後上京し、15年ほど東京で暮らした後に夫の故郷である竹富島に移り住んだ。約47年前のことで、息子さんは3歳だった。

義妹から食堂を受け継ぎ、軽食と飲み物を提供する小さな喫茶店「民芸喫茶マキ」を始めたのはその頃だ。

「あの頃は、サータアンダギーやサンドイッチ、ソーメンチャンプルーをとにかくいっぱい作ったよ。東京にいた時は、食堂の仕事はしたことがなかったからこっちに来てから作るようになったよ」

観光のお客さんも島人も集う、そこかしこに懐かしさが漂うお店には、島に赴任する学校の先生たちも通ってくるそうだ。

「学校の校長室に行った時に、歴代の校長たちの写真が壁に飾ってあって、懐かしくなったよ。あの校長も、この校長も店に来ていたなと思い出してね。先日は、離任する学校の先生たちが飲みに来てくれたよ。さみしいね」と何人もの先生の名前を口にする美枝さん。

民宿も運営している萬木家。以前宿を手伝ってくれていたヘルパーさんたちは、島から旅立ってしまっても「マキのおかあさん」と美枝さんを慕って連絡をしてくるそうだ。

「日本全国から『おいで』って言ってもらえるから旅行に行きたいけど」と美枝さんは、店内の壁に貼られた色あせたグループ写真を指差して、「毎年来ていたよ。今はお便りだけだね、こっちに来ていって連絡があるよ」と話す。

「民芸喫茶マキ」は、美枝さんが竹富島で生きてきた証のような場所だと思った。そこには、47年間の記憶が色濃く蓄積されている。

鮮やかな赤色が美しい手作りのハイビスカスのジュースも、色あせた壁の写真やポスターも、ファイルに入った美枝さんが若かりし頃にお客さんとお店の前で一緒に写した記念写真も、20年生きた飼い猫の写真も、全部が「民芸喫茶マキ」で美枝さんそのものだった。



水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右QRコードホームページのContactから。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

南のひと 55

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。

橋爪 雅彦^{はしづめ まさひこ}さんは、約30年前に東京から石垣島に移り住み、現在はパッションフルーツなどをジャムやジュースに加工し販売する会社、「川平ファーム」を運営している。また、川平湾に面した約5,000坪の土地にて、自然科学をテーマにした庭園「石垣島サイエンスガーデン」も手がけている。

橋爪さんは植物画家でもあり、移住してきた当時は野生ランの図鑑制作に携わっていたが、図鑑出版の企画が中止になったことをきっかけに、悩みながらたどり着いたのがパッションフルーツの有機栽培とその加工だった。

東京では農業高校に通い、その当時の仲間とはお互いに刺激を与えあう関係性という。

「昔、学生時代の仲間と旅をした時に、『何かで1番になろう。日本1でも世界1でも』と話したことがあって、皆それぞれの道を極めています。私もパッションフルーツでナンバーワンになってみたいと思いながらやってきました。おそらく味の評価は、世界のトップレベルまで来たのではないかと思います」

橋爪さんは移住者として、地元の人の生活を荒らさず、一緒になって暮らすような生き方を大切にしている。それは人間界のことに止まらず、自然界との付き合い方にも共通しているように思う。

50年以上農業などが使われていない土地の庭園には、オアシスのごとくいつの間にか多くの虫や動物たちが自然と集まってくるようになった。

自分の基準を世界レベルで確かめながら土地と共に生きる橋爪さんの存在には、言葉にならない深みがある。それは長い年月をかけて築き上げてきた橋爪さんの営みからくるものだ。

この度、40年ほど前から描き始めた図版が『原色日本の蘭図譜』としてまとめられ、クラウドファン্ডを経て出版された。

「今後はサイエンスガーデンの園内で、のんびりと愛する植物の絵を描き続けていきたい」



水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右QRコードホームページのContactから。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

南のひと 56

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。

西表島の上原でサバニ大工として暮らす愛知県出身の國岡恭子さんは、大学を卒業してすぐ、約30年前に八重山に移り住んだ。

恭子さんは、2000年ごろ「しらほサンゴ村」で働いていた時に、白保の方々の海との関わりを聞き取りする仕事をしていました。その時に出会ったのが舟大工の新城康弘さんだった。

「新城さんの庭先には、切り出された舷側板が横たわっていて、その形がとても美しく、ちょっと稲妻が走るくらい何か感じて夢中で話しかけました。取材で新城さんの工房へと通ううちに、徐々に手伝うようになり、いつの間にか自分でもサバニを造りたいと思うようになっていました」

恭子さんがサバニ造りで大切にしているのは、「バランス」だ。側で見てきた新城さんのサバニを基に、均整を考えて図面を引いている。また、恭子さんのもにくる注文は女性がオーナーが多いことから、組み立てや少ない力でスムーズに操船できるような調整、果ては手触りなどまで気を配り工夫をこらしている。

現在、恭子さんは新たな取り組みに挑んでいる。新城さんの出身地、池間島の言葉で「サバニ」のことを「潮舟」（スウニ、スフニ）といい、この言葉との出会いがきっかけで、版画を用いた絵本を制作している。

「漢字もその響きもいいなと思うこの言葉は、いつか誰も口にしなくなりそうで、その言葉を形にしたという想いから『潮舟』の絵本を作り始めました。自分の舟って誰もが持てるものでもありません。でも舟を持つって嬉しいこと。絵本という形の舟を作って多くの人に舟主になってもらいたいと思って制作しています」

今年の4月に、師匠の新城さんは96歳でこの世を旅立った。

「時代に合ったサバニを造れよ」

新城さんが残した最後のアドバイスは、恭子さんの背中をまるでサバニの帆を膨らませる潮風のように、力強く押している。



水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右QRコードホームページのContactから。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

南のひと 57

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。

南フランス、アヴィニオン出身の鈴木バネッサさんは、学生の頃から日本に興味があり、美大を卒業後、日本へ行く費用を作るためにパリで働いていた。そして、オンラインの言語エクステンジプログラムで日本語を勉強していたところ、夫となる人と出会った。

2人は結婚し、東京で子育てをしながら暮らしていたが、家族と過ごす時間をもっと大切にしたいと2018年に竹富島に移り住んだ。

バネッサさんは、庭でニワトリを飼い、子どもたちと海辺で遊び、地域の人と共に島の行事を楽しむ。島のお年寄りからは民具づくりを習い、それを自分流にアレンジして籠やバッグを作ったり、サヤノタイプ(薬品を塗った紙に投影させたいものを置き、露光して作る青写真)で作品を作ったりするなど、毎日の暮らしそのものがクリエイティブで、手仕事に満ち溢れている。

島暮らしの中で得たインスピレーションは、バネッサさんのフィルターを通して彼女の作り出すものに命を吹き込む。そこには自由が宿っている。

今年で竹富島に来て5年目になるバネッサさんに、この島のどこが気に入っていますかと聞いてみた。

「島の雰囲気です。竹富島は本当に特別。台風前の風の音、昼とは全然違う夜の雰囲気、季節によって違う鳥の鳴き声、町並み、島の人、お年寄りが好き。それから、ここでの子育てが最高。都会にはない自由さがあるし、学校もみんな家族みたい」

鈴木家は、現在竹富島に家を建設中だ。

「今は、とーら(竹富島の言葉で昔の炊事用家屋)を建てているけど、家族で住めるふーや(母家)も建てたいと思っている。子どもたちにもちゃんとお家を残してあげたいし、ずっと住みたいから」

軽やかに、楽しそうに話すバネッサさんと会話をしていると、こちらも自然とワクワクした気分になる。まるで私が初めて竹富島と出会った時の感覚を呼び戻されているかのようだ。



水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右 QR コードホームページの Contact から。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

南のひと 58

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。

石垣島出身の中島清香^{なかじまきよか}さんは、1800年初頭から操業を始めた海人「みちたけ丸」の鮮魚店を祖母から受け継ぎ、夫と共に切り盛りしている。

清香さんの存在を初めて知ったのは、SNSの投稿を通してだった。清香さんの体の半分の大きさはありそうな大きな魚を両手で持ち、カメラに向かって満面の笑みを湛えている姿にクギ付けになった。他の投稿を追って見ると、大きな魚を真剣な面持ちで三枚におろしている映像があり、彼女の本気がひしひしと伝わってきた。それ以来、私はすっかり清香さんのファンになってしまった。

「小さい頃、家族でピクニックというと、バナナ公園でも、米原ビーチでもなく、漁船に乗って浜島に行っていました。お弁当を持って、犬を連れて、父の漁船に家族みんなで乗り込んで。満潮で浜島が海の底に消えてしまうまで滞在し、また漁船に乗り込んで帰ってくる。海が近くにあることが当たり前前の生活を送っていました。父が海へ漁に出かける姿をずっと見て育ったので、鮮魚店を受け継ぐことは、自然の流れのように感じました」

コロナ禍により魚の出荷量が減ってしまい大量の魚が破棄され続けた時に、清香さんは、命を賭けて漁に出る海人の労力や想いも、漁獲された魚の命も無駄にしてはいけないと強く感じるようになった。そのことがきっかけで、魚の加工商品の開発に挑戦するようになり、佃煮やふりかけ、オリーブオイル漬けやマリネなどの商品の他、魚の鱗を使ったお守りや、肝油などを用いたコスメ商品の開発にも力を注いでいる。

「私たちは、命をいただいているということをお忘れたい。そのことを娘にも伝えていきたいと思っています。魚を扱う仕事は、臭いし、大変だから本当に好きじゃないと務まらないと思います。私は、魚を見るのも、さばくのも、食べるのも、全部が好き」

彼女の弾むような笑顔には、自分の生き方への自信が表れている。妥協せず堂々と自分の「好き」に突き進んでいる姿はたくましく、まぶしい。



水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右QRコードホームページのContactから。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

南のひと 59

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。

石垣島出身の玉城裕基^{たましろひろき}さんと玉城浩平^{たましろこうへい}さん兄弟は、1800年初頭から続く海人（漁師）みちたけ丸の5代目だ。みちたけ丸は、石垣島で最初にマグロ延縄漁船、セイイカ漁、集魚灯漁を始めた先駆者でもある。

小さい頃から休日や夏休みには父親の漁の仕掛け作りなどの手伝いをしてきた長男の裕基さんも次男の浩平さんも、将来父親を継いで海人になろうとは全く思っていなかったと話す。そんな2人が海人になったきっかけは、今から約15年前に現役で漁に出ていた父親に「やってみるか？」と声をかけられたことだった。

2人の腕や足には刺青がある。

「海で遭難した時に、もし膨張した死体で発見されても、体に入れられた刺青で本人確認ができるようにと、日本全国海人は体に刺青を入れる人が多いんですよ」

海人は命をかけて漁に出る。常に死と隣り合わせの仕事だ。

それぞれに、海人として大切にしていることを聞いてみた。

裕基さん、「神様に失礼がないように、船を綺麗にすること。綺麗にしないと釣れないってジンクスがあるんですよ。これはオヤジから教わったことです」

浩平さん、「家族が幸せできるように、っていうのが1番大切にしていることです」

2人が漁に出ていて喜びを感じる時は、なんとっても大漁の時だと話す。

静かにたたずむ2人の間を小さな息子たちが走りまわり、時折甘えるように彼らの足に絡みついてきた。まるで2人の存在が大きな海で、息子たちはその中を自由に泳ぐ小魚たちのようにも見えた。



水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右QRコードホームページのContactから。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

南のひと 60

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。

黒島出身の仲嵩善希^{なかつたけ せんき}さんと初めて出会った場所は、黒島の豊年祭が執り行われた宮里海岸だった。

お祭りを撮影するために前日から泊まりがけで黒島へ入り、練習が行われている宮里海岸へ向かったのは夕日がオレンジ色に海岸を照らす頃だった。海岸へと降りる道の脇に島の青年たちが座っていた。中でもひととき存在感を放っている青年に惹きつけられ、思わず見入っていると目が合い、青年は目をそらすことなく軽く会釈をした。のちに、その青年が豊年祭で重要な役柄のウーニ（走者）である仲嵩善希さんだと知った。

宮里海岸の白砂を蹴り、颯爽と風を切りながら走り抜ける善希さんの姿は眩しく、黒島という島の魅力を全身から放っていた。

善希さんがウーニとして豊年祭に参加するのは、高校3年生以来2回目だそうです。ウーニとは善希さんにとってどのような存在なのかを聞いた。

「豊年祭の一番の見ものだと言われるパーレー競漕は、ウーニとして選ばれた人のみが走ることができ、東筋、宮里、保里、仲本のそれぞれの村から一人ずつ、計4名の選ばれた者だけが競走できる神聖なもので、僕にとって特別な存在です。コロナにより、4年ぶりに開催された豊年祭でウーニを走って、しみじみと伝統行事の大切さを感じました。また、今後の行事も出来る限り参加し、地元への貢献に努めたいと感じました。今回は、弟と棒術も披露しました。弟には黒島出身であり、黒島の伝統行事ができることを誇りに思っています」

善希さんは現在自衛官として仕事をしている。今後の目標を聞いた。

「今後の目標は、自衛隊で取れる資格をできる限り取得することです。また、先人たちが守ってきた石垣をはじめ、八重山を守る一人として、地元の期待を胸に自分の思う立派な自衛官を目指し今後も励んでいこうと思います」

善希さんには、責任感ということばがよく似合う。大切にしている人やものへの想いには淀み^{よど}が無く、その澄んだ眼差しはまっすぐに彼の故郷へと向けられている。



水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右QRコードホームページのContactから。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー

南のひと 61

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。

石垣島出身の宮良麻奈美^{みやらまなみ}さんは、「ゆいシネマを守る会」や石垣島に自衛隊駐屯地が建設される前に「石垣市住民投票を求める会」を立ち上げるなど、様々な活動に携わっている。

撮影に向かった先は、麻奈美さんの実家だ。石垣島の市街地にほど近いこの場所は、背の高い木々に囲まれ、南国の花々が咲き、バンシルーの枝がしなるほどに実をつけ、その魅惑的な香りが辺りを染めていた。案内された一番座は、庭と一体となって八重山風情を感じさせ、穏やかな時間が流れている。

この俗世界から切り離されたような、美しく、浮世離れた空間に麻奈美さんはしっかりと馴染んでいた。

麻奈美さんは、毎朝花や鳥を眺めながらこの庭を歩くそうだ。また、庭がよく見える縁側に机をおき、仕事をするのが日課だという。

「ここから見える景色が好きなんです。母が意識して赤や紫、黄色など色とりどりの植物を植えていて、季節によって咲く花も違います。庭で採れたレモングラスでお茶を淹れ、この景色を眺めながら過ごす時間が本当に幸せです。色々な活動していますが、それは今見えている世界をもっとおもしろく、深みを持たせ鮮やかにできたらという思いでやっています。鮮やかという表現はこの庭からきている気がします」

今後やってみたいことを尋ねると、意外なことに『何もやりたくない』です」と返ってきた。

「実は、自分は昔から何もやりたくない人で、理想は手の届く範囲が充実していて、その環境の中で穏やかに暮らすことです。何もやらなくても幸せな状況を作るために、今たくさん活動をしているとも言えますね。元々やりたいと思っていたことは、八重山の文化財や歴史など古いことを理解すること。自分にとってはそれが自然で当たり前のことだから」という。

帰りの車の中、どこかとても遠い楽園のような場所にいたような気分になり、心がとても満たされていた。麻奈美さんが求めているものが少し見えた気がした。



水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右QRコードホームページのContactから。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー